

〔資 料〕

張潮『幽夢影』 解説

郭 莉 莉

張潮の『幽夢影』は明代晩期、及び清代に盛んに作られた「清言小品」という形式の作品の一つである。「小品」は明代と清代を代表する古典文学形式であり、「小品文」とも呼ばれ、「詩」、「詞」、「曲」などの韻を踏む文体と相對して、韻を踏まない「散文」である。「小品」という名称は本来は仏教用語であり、仏教では仏經の完全訳本を「大品」と呼び、それと區別された簡略化された抄本のことを「小品」と呼んだ。明代の晩期において、多くの文人は自らが創作した独特の主題・風格を持つ文章をこの仏教用語にならって「小品」と呼び、文集名にもした⁽¹⁾。明代晩期と清代の文人がこの「小品」という文学を非常に熱心に創作し、大量の作品が世に出回り、結果「散文」の中の一つの文類として、当時そして後世に広く知られるようになり、明代と清代を代表する文学形式となった。

このような明代・清代の「小品」という文学の中に、さらに「清言」という独特の文学形式が存在する。「清言」の嚴密な定義は存在せず、当時自らの「小品」の作品を特に「清言」（もしくはそれに類似する呼び方）と呼んだ作家も嚴密な基準は持ち合わせていなかったものと思われるが、一般的には短くそして内容的に警句のようなものを「清言」としていた。「清言」の「清」は清高、清雅、清奇など、清いという意味であり、「清言」は清い言論、議論を指す。内容は清雅と思われる文人の趣味、書、画などを含む芸術品の鑑賞や、無欲であり、清高と思われる老莊思想、仏教思想に基づいた人生に関する格言などがある。当時はこの「清言」を

(1) 例えば朱国幀は『湧幢小品』、陳繼儒は『晚香堂小品』、王思任は『文飯小品』、華淑は『閒情小品』、陳天定は『古文小品』など、「小品」と名付けた明人文集が数多く存在する。

「清言小品」, 「清話」, 「清語」, 「言語小品」, 「雜著」などとも呼んだ。「清言」の形式をとった作品の作品集の名前にも様々なものがあり, 当時は「清言」という名称には統一されていなかった。例えば屠隆には『娑羅館清言』, 『続娑羅館清言』があり, 吳從先には『小窓自紀』があり, 陳繼儒には『太平清話』があった。その中でも成書が早かった屠隆の『娑羅館清言』に使われたことも一因となって, 現代の学術界においては「清言」もしくは「清言小品」という名称で, この形式の文学作品を指すのが一般的となっている。

明代や清代の「清言」作品の中で, 日本で最も広く知られているものは『菜根譚』であり, 版本の違う日本語注訳を入手することは容易である⁽²⁾。それに比べ, 思想内容や文学形式の面から見てもそれに価値相当する他の「清言」作品の注訳は少ない⁽³⁾。本稿は当時また近代の中国では知名度の高い張潮の『幽夢影』から二十五条を選び, 日本語の注訳を付ける⁽⁴⁾。

[一]

情之一字, 所以維持世界。才之一字, 所以粉飾乾坤。

◆情之一字 この「情」という一文字。情というもの。「～之一字」は一文字である概念を定義・解釈する際によく使用され, 「このただ一文字の～というもの」という意味である。この一条の後半にある「才之一字」も「才」という一文字, 才能というものという意味である。

(2) 原書の著者は洪自成である。日本語の注訳は今井宇三郎の『菜根譚』(岩波書店, 1977年), 中村璋八, 石川力山訳注『菜根譚』(講談社, 1986年), 吉田公平訳注『菜根譚』(たちばな出版, 1996年)など多数ある。

(3) 拙論「清言小品『小窓幽記』解説—「醒」の部から—」(千葉商大紀要第40巻第3号, 2002年), 「清言小品『小窓幽記』解説—「醒」・「情」・「峭」の部から—」(外国語外国文化研究第13号, 2003年), 「清言小品『小窓幽記』解説—「靈」の部から—」(千葉商大紀要第42巻第1号, 2004年)などは, 同じく明代晩期の清言小品集『小窓幽記』に日本語注訳を付けたものである。

(4) 全書計百五十数条がある。『幽夢影』の一部は1937年林語堂によって英訳され, 『生活的芸術』という彼の著書に収録された。それによって, 『幽夢影』は西洋の読者の間での知名度が高まったとされる。

◆所以 ～を可能にするもの。～を完成させる基となるもの。「所以維持世界」は世界を維持するもの。「所以粉飾乾坤」は世の中を装飾するものという意味。

◆乾坤 国家，天下，世界の代称。「乾」は天，「坤」は地を指す。

このただ一文字の「情」というものは，世の中を維持するものである。このただ一文字の「才」というものは，宇宙を美しく装飾するものである。

[二]

立品須発乎宋人之道学，涉世須参以晋代之風流。

◆発 発展する。拡大する。

◆宋人之道学 宋代の儒学。儒家学者朱熹を代表とする宋代の儒学は道学とも言う。

◆涉世 世間渡り。処世。

◆参 加える。参考とする。

◆晋代之風流 晋代文人の風雅な気品。「風流」は風雅である気質という意味。晋代文人は名声や物欲にとらわれない孤高な気品を持つ人物が多く，風雅な文人の象徴とされている。

人間としての品格を確立するには宋代文人の儒学を基本にしなければならない。世の中を渡っていくには，晋代文人の風雅な気品がなくてはならない。

[三]

律已宜帯秋氣，処世宜帯春氣。

◆律已 おのれを律する。自分をただす。

◆宜 適している。～するのは適当である。

◆帯 携帯する。身に付けるという意味である。

自分を律するには（寒さを感じさせる）秋の雰囲気のように厳しくすべきである。
世の中に対処するには（暖かさを感じさせる）春の雰囲気のように優しく対応すべきである。

[四]

能閑世人之所忙者，方能忙世人之所閑。

- ◆能 ～することができる。
- ◆閑 暇，のんびりしているという意。
- ◆方 ようやく，やっと。

世の人々が絶えず求め続けるものに対して目もくれずに悠然とすることができる者こそ，世の人々が対処する能力を持たずどうしていいか途方にくれてしまうことに対して関与することができる。

[五]

人莫樂於閑，非無所事事之謂也。閑則能讀書，閑則能遊名勝，閑則能交益友，閑則能飲酒，閑則能著書。天下之樂，孰大於是。

- ◆莫樂於閑 のんびりするより楽しいことはない。
- ◆無所事事 何もしない。仕事をしない。なんらなすところがない。
- ◆則 （二つの事柄の継起を表す）～すると。
- ◆交 友達になる。付き合う。交際する。
- ◆益友 交わってためになる友人。
- ◆孰大於是 これより大きいのは何か。「孰」は誰か，どれか，何かという意味。「是」はこれという意味。「此」と同義である。

人生において一番楽しいことはゆったりとした時間を持つことである。それは目標を持たず、することが一切ないという意味ではない。ゆったりとした時間を持っていれば、読書をすることができる。ゆったりとした時間を持っていれば、名勝を遊覧することができる。ゆったりとした時間を持っていれば、良い友と付き合うことができる。ゆったりとした時間を持っていれば、酒を楽しむことができる。ゆったりとした時間を持っていれば、本を執筆することができる。世における楽しさでこれ以上のものは何があるか？

[六]

妾美不如妻賢，錢多不如境順。

- ◆不如 ～ほどではない。(程度や能力が) 及ばない。
- ◆境順 得意の境遇。順境であること。

美しい妾を持つことより賢明な妻を持つことが望ましい。大金を所有することより順境であることが望ましい。

[七]

値太平世，生湖山郡，官長廉静，家道優裕，娶妻賢淑，生子聡慧，人生如此，可云全福。

- ◆値 ～にあたる。～にぶつかる。
- ◆太平 平安。平和。「太平世」は太平の世，平和の時代という意味。
- ◆家道 暮らし向き。「家道優裕」は暮らし向きが裕福であるという意味。
- ◆娶 めとる。嫁をもらう。
- ◆聡慧 賢い。聡明である。
- ◆可云 言える。「云」は云う，言うという意味。「可」は～することができるとい

う意味。

人生において、平和な時代に生き、山や湖の風景がある町で暮らし、上司は廉潔で尊厳のある人であり、暮らし向きは余裕があり、賢明で淑やかな妻を持ち、聡明な子供が居たら、すべての福を手に入れたと言える。

[八]

有工夫読書，謂之福。有力量濟人，謂之福。有学問著述，謂之福。無是非到耳，謂之福。有多聞直諒之友，謂之福。

◆工夫 暇な時間。暇。

◆謂之 それは～と言う。「謂」は言う，称する，呼ぶという意味。「之」はそれという意味。従って「謂之福」は，それは幸福と呼べるという意味である。ここでは「之」はそれぞれ「有工夫読書」「有力量濟人」「有学問著述」「無是非到耳」「有多聞直諒之友」のことを指す。

◆福 幸福。恵まれている。

◆濟人 人々を救済すること。

◆是非 他人の是か非かを議論する噂話という意味。「是非」の本来の意味は良いことと悪いことである。

◆多聞直諒 『論語』・「季氏篇」には「友直，友諒，友多聞，益矣。（正直である友，誠実である友，多聞である友。それは有益な友である。）」という一文があり，良い友の条件として「直」「諒」「多聞」であることが挙げられている。「直」は正直，「諒」は信実，誠実という意味である⁽⁵⁾。

読書する時間があるのは幸福である。人を手助けできる能力を持つことは幸福である。著述することができる学問を持つことは幸福である。人を批判する言論や噂

(5) 『論語』・「季氏篇」を参照。謝氷瑩等編訳，『新訳四書読本』（三民書局，1987年）260頁。

が耳に届かないことは幸福である。正直であり，誠実であり，かつ多聞である友がいることは幸福である。

[九]

不治生産，其後必致累人。専務交遊，其後必致累己。

- ◆不治生産 生産に従事しない，生産をもたらす職に就かないこと。「不事生産」とも言う。「治」は治める，従事するという意味である。
- ◆致 （原因に対する結果を述べる）～の結果になる。～することになる。「必致」は必ず～という結果に至るという意味である。
- ◆累 煩わす。関わりあう。巻き添えにする。「累人」は他人に迷惑をかけるという意味。「累己」は自分を困らせるという意味である。
- ◆専務 （ある行動に）夢中になる。「専」は一つのことに集中するという意味。「務」は務める，従事するという意味である。

仕事をせず，世の中に貢献しない者は，後で必ず人に迷惑をかけることになる。
うわべの付き合いに夢中になる者は，後で必ず自分を困らせることになる。

[十]

不得已而諛之者，寧以口，毋以筆。不得耐而罵之者，亦寧以口，毋以筆。

- ◆不得已而 どうしようもなく～しなくてはならない場合には。「不得」は，～することができないという意味。「不得已」の「已」は止めるという意味であるので，「不得已」は止めることができない，仕方がないという意味である。
- ◆諛 へつらう。おもねる。ここの「諛之」にある「之」はある人を指し，人にへつらう，おもねるという意味である。
- ◆寧 むしろ。いっそ。

◆以 ～をもって。～で。「以口」は口で、「以筆」は筆で、つまり書面でという意味である。

◆毋 ～するな。～なかれ。

◆不得耐而 耐えることができず～する場合には。「耐」は忍耐する、耐えるという意味である。

◆亦 も。

仕方がなく人にへつらわなければならない状況に追い込まれたら、口でへつらう方がまだしも良い。筆でへつらってはならない。耐えられなくなって人を罵らなければならないことになったら、同じく口で罵る方がまだしも良い。筆で罵ってはならない。

[十一]

物之能感人者，在天莫如月，在樂莫如琴，在動物莫如鵲，在植物莫如柳。

◆感人 人を感動，感心させる。

◆在天 天にあるものに関して。「在樂」「在動物」「在植物」はそれぞれ音楽においては、動物の中には、植物の中にはという意味である。

◆莫如 ～に相当するものはない。「莫」は一つもないという意味。また「莫如」は、むしろ～する方が良いという意味もある。その際は「不如」と同義である。

物の中で人を感動させることができるのは、空にあるものの中では月ほどのものはない。音楽に関しては琴ほどのものはない。生き物に関しては鵲ほどのものはない。植物の中では、柳ほどのものはない。

[十二]

有地上之山水，有画上之山水，有夢中之山水，有胸中之山水。地上者妙在邱壑深邃，

画上者妙在筆墨淋漓，夢中者妙在景象變幻，胸中者妙在位置自如。

- ◆妙 良い。素晴らしい。立派。「妙在～」は素晴らしさは～にあるという意味である。
- ◆邱壑 丘と谷。
- ◆深邃 深遠である。奥ゆかしい。
- ◆筆墨 筆と墨。また、書道や絵画の用筆，用墨などの技法。
- ◆淋漓 鮮やかである。
- ◆自如 思いのままにできる。自由自在である。

地上に実在する山水景色がある。絵画の中にある山水景色がある。夢の中に現れる山水景色がある。胸の中で想像した山水景色がある。実在する山水景色の一番勝れたところは丘や谷の奥ゆかしさである。絵に描かれた山水景色の一番勝れたところは用筆，用墨の素晴らしさにある。夢の中の山水景色の一番勝れたところは景色の変化の無限な可能性である。胸の中の山水景色の一番勝れたところは位置を思いのままにできることである。

[十三]

人須求可入詩，物須求可入画。

- ◆須 ～しなければならない。～すべきである。「須求」は求める，追求すべきであるという意味。
- ◆可入詩 詩の題材にすることができる。「可」は～することができるという意味。
- ◆可入画 絵画で描写する対象になれる。

人間は詩の題材になる人生を過ごすことを目標とすべきである。物に関しては絵の描写対象になるものを厳選し安置すべきである。

[十四]

莊周夢為蝴蝶，莊周之幸也。蝴蝶夢為莊周，蝴蝶之不幸也。

◆莊周夢為蝴蝶 莊子が自分は蝶々であるという夢を見たということ。「蝴蝶夢為莊周」は逆に蝶々が自分は莊子であるという夢を見たという意味。この一条は『莊子』の「齊物論」に書かれた寓話をもとにしている。原文は次のとおりである—「昔者莊周夢為胡蝶，栩栩然胡蝶也，自喻適志与！不知周也。俄然覺，則蘧蘧然周也。不知周之夢為胡蝶与，胡蝶之夢為周与？（昔，莊周（私）が夢の中で蝶になった。その時，私はひらひらとして，蝶そのものに成り切っていた。自由自在に楽しみ，自分が莊周であることなどを忘れていた。突然に目覚めるとなんと莊周であった。莊周が夢の中で蝶になったのか，蝶が夢の中で莊周となったのか私にもよく分からない。）」この寓話は人々が現実と認識することは実は夢であるという可能性を示すためのものであるとされている⁽⁶⁾。

◆幸 幸福。幸せ。

莊周が自分は蝶に変身したという夢を見るのは幸せである。蝶が自分は莊周に変身したという夢を見るのは不幸せである。

[十五]

少年須有老成之識見，老成人須有少年之襟懷。

◆少年 若者。

◆老成 老練である。練達である。「老成人」は老練である中年と老人。

◆識見 見識。

◆襟懷 胸中。気概。度胸。

(6) 『莊子』の「齊物論」を参照。『莊子今注今訳（上）』（中華書局，1983年）92頁。

若者は老練な見識を持つべきである。練達である中年や老人は若者のような冒険する気概を持つべきである。

[十六]

躬耕吾所不能，学灌園而已矣。樵薪吾所不能，学薙草而已矣。

- ◆躬耕 田を耕す。
- ◆灌 水遣りをする。灌漑する。
- ◆而已 だけ。
- ◆樵薪 柴を刈る。
- ◆薙草 除草する。「薙」は取り除くという意味である。

本格的な農家になることは私の能力の及ぶところではないので、庭園内の植物の水遣り程度のことを習っているところである。本格的な柴刈りは私の能力の及ぶところではないが、草取り程度のことを習っているところである。

[十七]

凡事不宜刻，若読書則不可不刻；凡事不宜貪，若買書則不可不貪；凡事不宜痴，若行善則不可不痴。

- ◆凡事 すべてのこと。万事。何事。
- ◆不宜 ~すべきではない。~するのは適当ではない。「宜」は適しているという意味である。
- ◆刻 基準が厳しい。やかましい。好みがるさい。選り好みをし過ぎて気難しい。
- ◆若 もし。
- ◆不可不 ~しなくてはならない。「不可」は~してはならない、~することができないという意味である。

すべての事において、選り好みをし過ぎることは望ましくない。しかし読書においては選り好みをせねばならない。すべての事において、欲張りであることは望ましくない。しかし本の購入には欲張りでなければならない。すべての事において、熱中し過ぎることは望ましくない。しかし善事を行うには熱中せねばならない。

[十八]

涉獵雖曰無用，猶勝於不通古今；清高固然可嘉，莫流於不識時務。

- ◆涉獵 (本を) 読みあさる。涉獵する。
- ◆雖 (逆接の) ～が。けれども。～と言えども。
- ◆猶勝 まだまし。「猶」はいまだに、なおという意味。「勝」は勝れてる、勝つという意味。
- ◆不通古今 昔と今に関する知識がないこと。「古今」は昔と今。「通」は精通するという意味。
- ◆清高 名声や物欲にとらわれない。孤高である。
- ◆固然 勿論～であるが。もとより～であるが。
- ◆嘉 嘉する。誉める。よしとする。
- ◆莫 ～するなかれ。～するな。～してはいけない。
- ◆流 悪い方向へ走る。墮落する。
- ◆不識時務 情勢を知らない。また、情勢の許さないことをする。「時務」はその時代の情勢という意味である。

漫然とした読書は無用と一般的に言われるが、古今のことを一切知らないよりはましである。世の中の事柄から距離をとり、名声や物欲にとらわれないのは確かに良いことであるが、時代の流れを掴めない人間にならないようにせねばならない。

[十九]

多情者不以生死易心，好飲者不以寒暑改量，喜読書者不以忙閑作輟。

- ◆易心 気持ちを変える。「易」は変える，改めるという意味である。
- ◆輟 中斷する。止める。

溢れる愛情を持つ人間はその生死を越えて愛する気持ちが変わることはない。飲酒を好む人間は季節や気候の変化によって飲酒の習慣を変えることがない。読書が好きな人間は忙しいという理由で読書を止めることはない。

[二十]

恥之一字，所以治君子；痛之一字，所以治小人。

- ◆治 治す。治療する。直す。誤りを正す。
- ◆君子 徳のすぐれた人，立派な人格を備えた教養のある人。
- ◆小人 「君子」の反対，徳の修養ができていない，器の小さい人間のこと。

恥というものは君子の誤りを正すものである。痛みというものは小人の誤りを正すものである。

[二十一]

何謂善人，無損於世者則謂之善人。何謂惡人，有害於世者則謂之惡人。

- ◆何謂 ～とは何か。何を意味するか。
- ◆損 損を与える。損なう。損害をもたらす。

善人というのは何か。この世に貢献し、害をもたらすことない人間は善人と呼べる。悪人というのは何か。この世に貢献せず、害をもたらす人間を悪人と言う。

[二十二]

無善無悪是聖人，善多悪少是賢者，善少悪多是庸人，有悪無善是小人，有善無悪是仙仏。

- ◆賢者 儒家の教えにおいては、道徳修養の理想人格として、「聖」（聖人）や「賢」（賢者）など挙げられている。徳の一番勝れた者は聖人であり、次は賢者である。
- ◆庸人 平凡な人。凡人。

善も悪もないのは聖人である。善が多く悪が少ないのは賢者である。善が少なく悪が多いのは凡人である。悪があり善がないのは小人である。善があり悪がないのは仏や仙人である。

[二十三]

黒与白交，黒能汚白，白不能掩黒；香与臭混，臭能勝香，香不能敵臭；此君子小人相攻之大勢也。

- ◆交 相接する。あれこれ入り交じる。同時に現れる。
- ◆汚 汚す。けがす。
- ◆掩 隠す。隠れる。掩蔽する。
- ◆敵 匹敵する。対抗する。防ぎ止める。

黒と白が入り交じると、黒は白を汚すことができるが、白は黒の汚れを隠すことができない。香りと臭みが混同すると、臭みは香りを押さえ、香りは臭みに勝てない。これはまさに君子と小人が対立する時の情勢である。

[二十四]

人非聖賢安能無所不知。祇知其一，惟恐不止其一，復求知其二者上也；止知其一，因人言始知有其二者次也；止知其一，人言有二而莫之信者，又其次也；止知其一，惡人言有其二者，斯下之下矣。

- ◆安 どのようにして。「能」は～することができる。「安能」はどうやってできるのかという意味である。
- ◆無所不知 知らないものは何一つない。何でも知っている。
- ◆祇 ただ～だけ。「只」や「止」と同義である。この一条にある「不止」はただ～だけではないという意味である。
- ◆惟恐 ただ～だけ恐れる。「惟」もただ～だけという意味である。
- ◆復 再び。また。
- ◆上 上等である。最上である。一番良い。
- ◆因 ～によって。～のために。「因人言」は人から聞いた話によってという意味である。
- ◆而 ここでは、意味がまったく反対の要素を連結する「～のに」。
- ◆惡 嫌悪する。反感を持つ。
- ◆斯 これ。「此」と同義である。
- ◆下之下 最下位。「下」は等級で下の方を指す。

人間は聖人や賢者でなければ、どうやってすべてのことを知り尽くすことができるのか。一つのことを知った後、それは真実とは限らないのではないかと恐れ、さらに違う事実を探求しようとする者は最上の人間である。一つだけを知り、他人の話聞き、違う事実の存在を知るようになる者はその次に良い。一つだけ知り、他人が違う事実を言っても信じようとしない者はそれより下である。一つだけ知り、他人に違う事実を言われるのを嫌がる者は一番下の人間である。

[二十五]

傲骨不可無，傲心不可有；無傲骨則近於鄙夫，有傲心不得為君子。

- ◆傲 おごり高ぶること。傲慢である。「傲骨」とは屈しない性格という肯定的な意味を持つ。「傲心」は人や物を軽視する傲慢な態度，周囲を眼下に見下す心という意味である。
- ◆鄙夫 卑しい人。粗野な人。
- ◆不得 ～することができない。「不得為君子」は君子になることができないという意味である。

人間には容易に屈しない高い自尊心がなくてはならない。しかし人を軽んじるような自尊心を持つてはいけない。容易に屈しない高い自尊心がなければ平凡な人と違わない。人を軽視する考えを持つ人間は君子になどなれない。

参考文献

- 方雪蓮等注釈，張潮原著『幽夢影』，漢風出版社，1992年。
黎明編校，林語堂英訳，張潮原著『幽夢影』，正中書局，1988年。
羅立剛校注，『小窓幽記（外二種）』（明清小品叢刊），上海古籍出版社，2000年。
吳言生編注，『小窓幽紀』（仏縁叢書），陝西旅游出版社，1999年。
盧豊編注，『小窓幽記解説』，黄山書社，2002年。
洪自誠，『菜根談』，岳麓書社，1991年。
今井宇三郎注訳，『菜根譚』，岩波書店，1977年。
中村璋八，石川力山訳注，『菜根譚』，講談社，1986年。
陳繼儒，『眉公雜著』（1～4），偉文図書公司，1977年。
胡紹棠編注，『陳眉公小品』（明人小品十家），偉文図書公司，1977年。
吳言生編注，『小窓自紀』，陝西旅游出版社，1999年。
程不識編注，『明清清言小品』，湖北辭書出版社，1993年。
台湾中央図書館編，『明人伝記資料索引』，中華書局，1987年。
陳万益，『晚明小品与明季文人生活』，大安出版社，1988年。
曹淑娟，『晚明性靈小品研究』，文津出版社，1988年。
吳承学，『晚明小品研究』，江蘇古籍出版社，1998年。

- 謝水瑩等編訳、『新訳四書読本』，三民書局，1987年。
- 陳鼓應註訳、『莊子今注今訳（上・中・下）』，中華書局，1983年。
- Kuo, Lili. *On Aesthetic Issues Surrounding the Late Ming Landscape Essay*, MI: UMI, 2001.
- 羅筠筠，『靈与趣的意境—晚明小品文美学研究』，社会科学文献出版社，2001年。
- 郭莉莉，「清言小品『小窓幽記』解説—「醒」の部から—」，『千葉商大紀要』第40巻第3号，千葉商科大学国府台学会，2002年。
- 郭莉莉，「清言小品『小窓幽記』解説—「醒」・「情」・「峭」の部から—」，『外国語外国文化研究』第13号，国土館大学外国語外国文化研究会，2003年。
- 郭莉莉，「清言小品『小窓幽記』解説—「靈」の部から—」，『千葉商大紀要』第42巻第1号，千葉商科大学国府台学会，2004年。
- 郭莉莉，「明代晩期の清言小品と真の追求ということについて」，『外国語教育論集』第27号，筑波大学外国語センター，2005年。
- 郭莉莉，「先秦時代の儒家と道家の言語に対する見方について—言語と意の関係から—」第41巻第1・2合併号，千葉商科大学国府台学会，2003年。
- 郭莉莉，「儒家思想と道家思想に見られる文芸への肯定的な見解と否定的な見解に関する考察」，第14号，国土館大学外国語外国文化研究会，2004年。